

# クラス担当者の実践観，教室観，教師観は どのように変容したか

## — 5 学期にわたる「イベント企画プロジェクト」のリフレクションから —

How the Teacher Have Transformed Their Belief of the Value of Education Practice, Classroom and Teacher:  
Reflection of “Let’s produce an event” for Five Semesters

古屋 憲章・古賀 和恵・三代 純平

### 要旨

本研究では、「イベント企画プロジェクト」における筆者らの実践観，教室観，教師観が次のように変容する過程を記述した。実践観：筆者らの問題意識が反映されたイベントの企画・開催を意図する活動からイベントを企画・開催するという仕事を学習者が協働で主体的に遂行する活動へ。教室観：学期ごとに区切られた，固定的で閉じられたコミュニティから時間的な広がりを持ち，空間的に拡張する可能性を持つコミュニティへ。教師観：クラス活動の方向づけや軌道修正，クラス活動において発生した問題の解消を行う役割を担う存在からクラス活動を見守り，「イベント企画プロジェクト」の教室というコミュニティを他の様々なコミュニティとつなげる役割を担う存在へ。また，5 学期にわたる実践の過程で絶えず行われていた二つのあり方によるリフレクション，すなわち，実践の現状を把握するリフレクション，実践の構造を把握するリフレクションを行き来することが，筆者らの実践観，教室観，教師観の変容を支えていたことが示唆された。

キーワード：リフレクション，実践を支える価値観の変容，実践の現状の把握，実践の構造の把握

### 1. 「イベント企画プロジェクト」立ち上げの経緯と現在までの過程

私たち<sup>1)</sup>は，早稲田大学日本語教育研究センター（以下，センター）において，「総合活動型日本語教育」の実践を行ってきた。「総合活動型日本語教育」は，細川英雄により開発されたプログラムである。「総合活動型日本語教育」においては，学習者が個々の問題関心をテーマに選び，そのテーマについて，クラスメイトとの対話を通じて考えを深化させつつ，レポートを作成するという活動が行われる（細川・武・津村・星野・橋本・牛窪 2007）。2008 年頃，私たちは，「総合活動型日本語教育」を実践しながら，個々の学習者が「自己の問題意識」をもとにレポートのテーマを設定することに次のような違和感を覚えるようになった。学習者がそれぞれ別々の問題意識をレポートのテーマにすることにより，クラス活動としてのまとまりが失われ，主体的にクラス活動に関わるのが難しくなるのではないか。

また，当時，私たちは，授業等を通じて自分たちが接する留学生から「日本人の学生と話す機会が少ない」という声をたびたび耳にしていた。留学生の声を聞き，私たちは次のように考えた。留学生が日本人学生と話す機会が少ないのは，留学生という存在が大学コミュニティにおいて周辺化されているためではないか。ならば，私たちは，留学生が周辺化を自分たちの問題として捉えると同時に，留学生の周辺化という問題を日本人の学生とともに考えられるような場を創る必要がある

のではない。

以上のような問題意識をもとに、私たちは新たな実践を立ち上げることにした。実践を立ち上げるにあたり、まず、次の二点を実践の中心に置くことを決めた。①学習者が話し合いを通じて、問題意識を共有する。②協働で一つの活動を行う。そして、①②を中心に「イベント企画プロジェクト」という実践をデザインした。「イベント企画プロジェクト」は、クラス内、あるいは学内だけではなく、広く外部に開かれたオープンなイベントをクラスのメンバーである学習者が全て自分たちで企画・開催するという実践である。「イベント企画プロジェクト」の目的は、次の二点である。(1) 自分たちが大学生活を送る中で感じている問題をクラスのメンバーで共有し、共有された問題を解決するための話し合いの場として、イベントを企画する。(2) クラスのメンバーと協働でイベントを企画・開催する経験を通し、学びを形成する。

上述したような過程を経て、私たちは2009年度春学期にセンター設置のテーマ科目として「イベント企画プロジェクト<sup>2)</sup> 6-8<sup>3)</sup>」を立ち上げ、実践を開始した。以後、「イベント企画プロジェクト」は、実践の計画、実行と観察、リフレクション、(リフレクションに基づく) 実践の再計画というサイクルによるアクションリサーチ<sup>4)</sup>として継続的に実施されている。2011年度秋学期現在、6学期目の実践が行われている。

## 2. 本研究に至る経緯と本研究の目的

私たちはこれまで「イベント企画プロジェクト」の実践のうち、主に1学期目から3学期目の実践を対象とする研究を行ってきた(古賀・三代・古屋 2010a, 古賀・三代・古屋 2010b, 古賀・三代・古屋 2010c, 古屋・古賀・三代 2011)。一連の研究においては、「イベント企画プロジェクト」を一つの実践共同体と捉え、実践共同体の変容、及び実践共同体が変容する中で学習者が実感した学びに関し、記述してきた。

上述したような研究は、私たちにとって「イベント企画プロジェクト」という実践への理解を深める営みであると同時に、その時期その時期の自分たちの言動や意識をふり返るリフレクションともなっていた。リフレクションを重ねる中で、私たちは、「イベント企画プロジェクト」立ち上げ当初に抱いていた「イベント企画プロジェクト」とはこのような実践で、「イベント企画プロジェクト」の教室はこのような場所で、担当者は「イベント企画プロジェクト」においてこのような役割を担うべきであるという考え、つまり、「イベント企画プロジェクト」の実践観、「イベント企画プロジェクト」の教室観、「イベント企画プロジェクト」における教師観が変容していくのを実感するようになった。そこで、本研究では、私たちの「イベント企画プロジェクト」の実践観、「イベント企画プロジェクト」の教室観、「イベント企画プロジェクト」における教師観が変容する過程を描く。本研究の目的は、私たちの「イベント企画プロジェクト」に関する価値観が変容する過程から、日本語教師のリフレクションに関する何らかの示唆を得ることである。

## 3. 分析方法

分析資料は、2009年度春学期から2011年度春学期までの5学期分の授業記録、及びTA報告書である。授業記録は、毎週授業後に担当者が執筆した。授業記録に記載されている内容は、その日

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

の予定, 授業内容, 授業に関するコメント, 授業後に行ったミーティングの話し合い内容, 回目の予定等である。TA 報告書は, 毎週授業後に TA が執筆した。TA 報告書に記載されている内容は, 活動の様子, 授業に関するコメント, 今後の課題等である。これら分析資料を, 次の三つの観点で分析した。

- 1) 「イベント企画プロジェクト」を実践する過程で, 私たちの「イベント企画プロジェクト」の実践観はどのように変容したか。
- 2) 「イベント企画プロジェクト」を実践する過程で, 私たちの「イベント企画プロジェクト」の教室観はどのように変容したか。
- 3) 「イベント企画プロジェクト」を実践する過程で, 私たちの「イベント企画プロジェクト」における教師観はどのように変容したか。

分析は, 次の手順で行った。①資料から担当者の行動, 考えが記述されている部分を抜き出す。②①で抜き出した部分に上述した 1) 2) 3) の観点に基づき, コードを付す。③②で付したコードをグルーピングし, カテゴリーを作る。

本章では, 上述した 1) 2) 3) の変容の過程を, 分析により得られたコード, 及びカテゴリーを用い, 記述する。

#### 4. 「イベント企画プロジェクト」における私たちの価値観の変容

本章では 2009 年度春学期から 2011 年度春学期までの私たちの価値観が変容する過程を学期ごとに記述するという形式を採る。まず, 当該学期の「イベント企画プロジェクト」の概要を簡単に記述する。次に当該学期における私たちの「イベント企画プロジェクト」の実践観, 及び教室観, 「イベント企画プロジェクト」における教師観が変容する過程を記述する。

##### 4-1. 2009 年度春学期「イベント企画プロジェクト」(以下「09 春」)

###### 4-1-1. 実践概要

■期間：2009 年 4 月 9 日～7 月 23 日（週 1 コマ＝90 分×15 週）

■クラス参加者：学習者 22 名, 日本人学生ボランティア 1 名, 担当者 1 名, TA1 名<sup>5)</sup>

■クラス活動の流れ：

学期開始当初より, クラス活動の進行は学習者に委ねられた。序盤には, 選出された 2 名が司会を担ったが, 中盤以降, 司会者は毎週交代することになった。「イベント企画プロジェクト」は, 2009 年度は「討論会プロジェクト」という科目名であり（注 2 参照）, 「09 春」は, イベントとして討論会を行うという設定であった。そこで, 討論会のテーマが検討され, 「同性結婚はどうか」というテーマに一旦は決定した。テーマ決定後, このテーマで討論会ができるかどうかを検討するために, 模擬討論会が行われた。その結果, 再度テーマを設定し直すことになり, 最終的には「国際交流—国際交流のためのイベントはたくさんあるのに, うまく交流できないのはなぜか—」というテーマに決定した。その後, 企画内容の検討が行われ, 四つの役割班に分かれて準備がなされた。そして, 7 月 11 日に行われたイベント, 「国際交流パーティー」には, 学内外の日本人学生や日本語学校の学生など, クラス外から 30 名を超える参加があった。イベントは, アイスブレイキングのためのゲーム→グループディスカッション→グループディスカッションで話し合った内容の全体

共有という流れで進行した。イベント後の授業では、担当者主導により、クラス活動の振り返りが行われた。

#### 4-1-2. 2009 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

1. で述べたように、「イベント企画プロジェクト」の立ち上げに際し、私たちには大学コミュニティにおいて留学生が周辺化されているという問題意識があった。そこで、学習者が大学生活において感じている問題点や疑問点をテーマとしてクラス外の日本人学生や留学生と討論会を行い、問題解決を図ることをクラス活動の目的の一つに据えた。そして、討論会の企画・開催によって、留学生が大学コミュニティに参加できるようになること目指して「イベント企画プロジェクト」を構想した。以下の記述には、こうした私たちの考えが表れている。

ディベートのように勝ち負けを決めるために討論するというイメージではない。日常生活や大学生活の中で感じている問題や違和感などについて、どうすれば解決できるかを目標として話し合うということを考えていた。解決までいなくても話し合っただけよかったと思えるような議論ができればいいと思う。(090507 授業記録\_授業内容)

これは、討論会ということばかりディベートをイメージしていた学習者から、討論会では何をするのかを聞かれた際に答えた内容である。このように、問題解決のための討論会を行うことを目的としていたことから、私たちはこの目的を達成するためには、解決したい問題は何かを学習者自身が考え、クラスのメンバーが問題意識を共有する必要があると考えた。しかし、たまたま集まってきた 20 名を超える学習者が問題意識を掘り起こし、共有していくのは困難であった。そのため、イベントの内容が問題意識やイベントの目的と乖離するという事態が生じた。

以上のように、「09 春」には、私たちは、「イベント企画プロジェクト」を大学コミュニティにおける留学生の周辺化という私たちの問題意識に基づき、留学生の問題解決のための討論会を開催する場として捉えていた。また、問題解決のための討論会を行うためには、クラスのメンバーが問題意識を共有する必要があると考えていた。しかし、学習者が何も無いところから問題意識を話し合い、共有していくことは困難であり、いかにしてそれを実現するかが大きな課題となった。

#### 4-1-3. 2009 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

「09 春」には、私たちは教室を一つのコミュニティとして捉えていた。そして、コミュニティ形成や学習者のコミュニティへの参加の仕方に着目していた。

クラスがどのようなコミュニティになっていくか、その中で、学生たちは、どのような参加をしていくかを注意深く見ていきたい。(090409TA 報告書\_今後の課題)

また、学習者個人とコミュニティ全体の両側面から、学びや成長を捉えていた。

一人一人の参加のスタイルと、それに伴う学びの多様性と、コミュニティ全体としての変化、成長のようなものを両方捉えていけるような観察を考えたい。(090416TA 報告書\_感想)

以上の記述に示されているように、「09 春」において私たちは、「イベント企画プロジェクト」の教室をコミュニティと捉えていた。そのうえで、「イベント企画プロジェクト」の教室は、学習者がクラス活動を通してコミュニティの形成とコミュニティへの参加を経験する場であり、そのプロセスにおいて、個々の学習者、あるいは、コミュニティ全体に学びや成長がもたらされると考え

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

ていた。

#### 4-1-4. 2009 年度春学期「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

「イベント企画プロジェクト」において、私たちは、学習者がクラス活動の中で生じる問題をクラスのメンバーとの協働によって乗り越え、学習者自身で解決していくことを重視した。問題が起きた際に担当者が介入することは、学習者が主体的に考え、行動することを阻む結果につながりかねない。そのため、私たちは、「イベント企画プロジェクト」における担当者はクラス活動に極力関与・介入せず、見守り役を担う存在であると捉えていた。そこで、クラス活動開始直後に次のような行動をとった。

前に立っていると進行係のようになってしまうと思い、以上を説明した後、私と三代さんは一番後ろの席に移動。(090416 授業記録\_授業内容)

しかし、「09 春」をそれ以降と比べると、私たちはクラス活動にかなり関与・介入している。

関与には、メーリングリスト（以下、ML）の開設、クラス活動やイベント開催時に必要な備品の準備、司会者等への注意・確認・アドバイス、学習者からの質問に応じる形での討論会のテーマや目的・問題意識に対する考えの表明、イベント終了後の授業において行った担当者主導による振り返りの実施などが挙げられる。振り返りは、クラスでの話し合いに加え、振り返りシートにも記入してもらった。担当者主導による振り返りを行ったのは、経験から学びを見出すためには経験を振り返ることが必要であり、そのような振り返りを促す役割は、担当者が担っていると考えていたためである。以上のように、私たちは関与を通して、クラス活動の活性化や遂行のための環境整備、注意・確認・アドバイス、クラス活動の方向づけを行う役割を担う存在として、クラス活動に関わっていた。

介入には、討論会の目的に対する私たちの考えの提示、テーマ決め段階におけるクラス活動の振り返り実施の指示、ML に振り返りのための意見を送ることへの指示がある。こうした介入を行った理由として、次の3点が挙げられる。1) 「討論会」ということばから、ディベートをイメージする学習者がいた。2) 最初に決まった「同性結婚はどうか」というテーマが問題をはらむものであった。3) 学習者の問題意識に基づきイベントを企画・開催することに対するこだわりが私たちの中にあった。

1) については、クラス活動開始当初より、ディベートを行うと誤解している学習者が見られた。そのため、自分たちの問題を解決するためにクラス外の日本人学生や留学生と討論会を行う、という説明を繰り返し行う必要があった。

2) については、「同性結婚」に対する偏見や差別意識に学習者自身が気づいていないという問題があった。そのため、どのような問題意識に基づくテーマかという点や、同性結婚というテーマをディベート形式で行うことの是非が議論されないまま企画が進んでいることに私たちは危惧の念を抱いた。そこで、私たちはクラス活動の振り返りを行い、なぜこのテーマで討論したいのか、自分たちにとってこのテーマで討論する意味は何かを考えるよう指示した。

3) については、すでに述べたように、私たちは問題解決のための討論会を行うことを目的としていたことから、どのような問題意識に基づいて討論会を行うのかを明確にしておくことが必要であると考えていた。しかし、問題意識へのこだわりは、私たちが「総合活動型日本語教育」に長く

携わってきた経験からの影響もあったと推測される。「総合活動型日本語教育」では、テーマのもとになっている学習者の問題意識を深く掘り下げていき、その過程で学習者が自身の価値観を見出していくことが目指される。「総合活動型日本語教育」における経験から、私たちは、「09春」においても、テーマのもとになっている問題意識を深く掘り下げていくことを重視していた。そのため、自分たちの問題意識に基づく討論会を行うことについてたびたび説明し、また、上述の「同性結婚」というテーマについてもそのテーマで討論する意味を問うた。

以上三つの理由により、私たちはクラス活動に大きく介入した。私たちの介入により討論会のテーマは変更され、新たに提案されたテーマのもとになっている問題意識をめぐって話し合いがなされた。その結果、イベントは問題解決に向けてイベント参加者が話し合うという形態になった。つまり、私たちの介入はクラス活動の方向性を軌道修正することへとつながったのである。このように、私たちはクラス活動の目的に即した軌道修正を行う役割を担う存在として、クラス活動に関わっていた。

直接クラス活動に関与・介入しないまでも、クラス活動の展開の予測、予測に基づくクラス活動の内容、及び関与・介入の検討を私たちは毎回のミーティングで行っていた。

次回、話し合う必要がある事項：テーマ、形態を明確にする。／今後のスケジュールを立てる。／作業の進め方を検討する。→提出された予定を見て、上記内容が入っていなければ、こちらから提案する。(090604 授業記録\_ミーティング)

ただし、関与・介入を想定していても、クラス活動の展開次第で行わない場合も多かった。

上記と同様、直接的な関与・介入を伴わない行動として、私たちはクラス活動を進めていくための仕掛けの検討もしばしば行っている。

バラバラと出てきた意見を取り上げ、整理しつつ、一つひとつ何かを決定して進めていくためには、要所所で担当者のほうから何らか道すじを示す必要があるのかもしれない。(090528 授業記録\_コメント)

以上のクラス活動の展開の予測、クラス活動の内容や関与・介入、及び仕掛けの検討は、いずれもクラス活動において生じる問題の解消に向けた行動と言える。私たちは、問題解消を図るのは担当者の役割という認識のもと、いかにして問題解消を図るかを常に考えつつ、クラス活動を見守っていた。

しかし、クラス活動に関与・介入したり、問題解消を図ったりすることは、学習者が主体的にクラス活動を進めて行くこととの対立をはらんでいる。そのため、担当者主導になることへの懸念がつきまとい、しばしば介入・非介入の狭間で葛藤が起こった。

途中途中でぶつかる問題をどう捉え、どう解決していくのか、という点を立ち止まって考えることにつながるような問いかけをするという形での関与のしかたもあるか。しかし、それは学生が主体的に活動を進めていくこととどう関わるだろうか。(090423 授業記録\_コメント)

以上述べたように、私たちは「09春」において、基本的にはクラス活動の見守り役というスタンスをとりつつ、環境整備、注意・確認・アドバイス、クラス活動の方向づけ、軌道修正、問題解消を行う存在として、クラス活動に関わっていた。しかし、一方で、そうした存在として関わることは、学習者の主体的なクラス活動への参加を阻害することへとつながるのではないかという危惧も抱き、どのような存在として関わるべきかを常に議論していた。

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

## 4-2. 2009 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」(以下「09 秋」)

### 4-2-1. 実践概要

■期間：2009 年 10 月 1 日～2010 年 1 月 28 日（週 1 コマ＝90 分×15 週）

■クラス参加者：学習者 26 名（うち 2 名は「09 春」履修者）日本人学生ボランティア 4 名，留学生ボランティア 1 名（「09 春」履修者），担当者 1 名，TA1 名

■クラス活動の流れ：

「09 春」には毎週司会者が交代したことにより，議論を積み上げていくことが困難になるという問題が生じたことから，「09 秋」には執行部の設置を提案した。その結果，リーダー 1 名，補佐 2 名が選出され，以後リーダーが中心となってクラス活動が進められた。また，「09 春」には問題意識を共有してイベントのテーマを考えることが困難であったことから，「09 秋」にはあらかじめ交流をメインテーマとして設定した。話し合いでは，交流の目的や交流によって何が得られるのかについて検討がなされ，イベントの目的は次の二つに絞られた。①外国人に対する先入観を壊す。②イベントを通して形成された良い関係を持続けられるようにする。そして，①②の目的に照らし，イベント参加者と料理を作ることが決定した。その後具体的な内容が検討され，三つの役割班に分かれて準備が進められた。1 月 16 日に行われたイベント，「作ろう！ 食べよう！ ―国際料理で楽しめる交流会―」には，クラス外の日本人学生，留学生等十数名の参加があった。イベントは，ゲーム→料理（クラスのメンバーが準備した餃子の具を一緒に包む）→歓談しながら食事→クラスのメンバーが作ったお好み焼き・焼きそばを食べながらのゲーム，という流れで行われた。

### 4-2-2. 2009 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

「09 春」には，討論会ということばかりからディベートをイメージする学習者がいたことがクラス活動の方向性に大きく影響した。そのため，「09 秋」は，討論会ではなく，クラスの外に開かれたイベントを企画・実施することをクラス活動の目的として掲げた。

「交流」をメインテーマとして，クラス外の人を交えたイベントを企画・実施すること，イベントの企画実施を通して，自分の「交流」を振り返り，考えていくことを確認。（091015 授業記録\_授業内容）

この時点で，私たちの「イベント企画プロジェクト」の実践は，問題解決に向けた討論会の実施からイベントの実施へと，クラス活動の目的を大きく転換した。しかし，上述の「イベントの企画・実施を通して自分の『交流』を振り返り，考えていくこと」という中には，交流に関する問題を解決するという意図が含まれている。従って，交流に対する学習者の問題意識が出発点となる。つまり，私たちは問題意識を共有するところからイベントのテーマや目的を考えるという点を引き続き重視していたのである。しかし，元々全員が交流に興味・関心や問題意識を抱いて参加しているわけではないため，問題意識を共有することはやはり困難であった。

一方で，学習者が大学生活において問題を抱えているという私たちの問題意識自体への疑問も生じ，「イベント企画プロジェクト」をどのような場として捉えるかという点を改めて問い直す必要性が出てきた。

そもそもこの授業の出発点には，留学生が周辺化されているという我々の問題意識があったが，本当にそうなのだろうか。我々自身が，再度何を目的にどのようなことを行なっていくのか，もう一度考える必要がある。（091217 授業記録\_ミーティング）

以上のように、「09 秋」には、「イベント企画プロジェクト」の目的をイベントの企画・開催へと転換したものの、私たちは引き続き問題意識の共有をクラス活動の出発点と考えていた。しかし、大学コミュニティにおける留学生の周辺化という私たちの問題意識そのものを問い直す必要があるのではないかという認識に至り、私たちは、「イベント企画プロジェクト」をどのような場と捉えるかを再考し始めた。

#### 4-2-3. 2009 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

「09 秋」も「09 春」に引き続き、私たちは「イベント企画プロジェクト」の教室をコミュニティと捉えていた。加えて、「イベント企画プロジェクト」の教室を空間的に拡張する可能性を持つコミュニティとして捉えるという着想を得た。具体的には、クラス外のコミュニティとつながったり、クラス外の参加者とのつながりが継続されたりするようなコミュニティである。このような着想は、一つのグループから出された企画案がきっかけとなって得られた。

D グループで出た、一つの団体と継続的に交流していくという案や、毎回授業に参加してくれる人を募って、授業内で一緒に何かをやり、最後に大きなイベントを実施する、という案はおもしろいと思った。今回は、時間的に無理だが、検討の余地はあるかもしれない。(091119 授業記録\_コメント)

さらに、「イベント企画プロジェクト」の教室を時間的な広がりを持ったコミュニティとして捉えるという着想をも得た。具体的には、過去にイベントに参加した人や「イベント企画プロジェクト」のメンバーだった学習者とのつながりが継続されるようなコミュニティである。

参加募集、およびイベント後、参加者とのゆるやかなつながりを継続させていくツールとして、mixi（または Facebook）を利用するといいいのではないか。前学期に参加した学生にも参加してもらえし、今後も継続的に活用していくことで、様々なつながりをつくっていくことができる。(091203 授業記録\_ミーティング)

以上のように、「09 春」同様「09 秋」において、私たちは「イベント企画プロジェクト」の教室をコミュニティと捉えていた。それがさらに発展し、「イベント企画プロジェクト」の教室を時間的な広がりを持ち、空間的に拡張する可能性を持つコミュニティとして捉えるという着想を得た。

#### 4-2-4. 2009 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

私たちは「09 秋」においても、基本的には見守り役というスタンスで臨みつつ、関与・介入も行っている。

関与には、クラス活動時やイベント時に必要な備品の準備、イベントを行う際の注意・確認、リーダーへのアドバイスや励まし、学習者からの質問に答える形での意見の表明、担当者主導による振り返りの実施などが挙げられる。つまり、「09 春」にも見出されたクラス活動の活性化や遂行のための環境整備、注意・確認・アドバイス、クラス活動の方向づけを行う役割を担う存在として、私たちはクラス活動に関わっていた。

介入については、例えば、次のような話し合いの方向性を変えるような提案を行っている。

料理を食べる会をやるとしたら、自分たちで料理を作るかどうかという話になっていったが、三代さんより、何をするかを早急に決めるのではなく、もっと「交流」のあり方などをゆっくり話し合ったらどうかという提案がなされる。(091015 授業記録\_授業内容)

この提案の根底には、具体的なイベント内容を検討する前に、まずは交流に対する問題意識を

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

掘り下げていくことが重要であるという考えがある。この考えに基づき、ここでは「09 春」同様、クラス活動の目的に即した軌道修正を行う役割を担っている。しかし、同時に介入するか否かについての葛藤も引き続き抱えていた。

どの程度話し合いに介入するのか（しないのか）、判断が難しい。待っていれば、学生のほうから意見が出てくることもあるので、どのタイミングであるかも難しい。（091015 授業記録\_ミーティング）

ただし、軌道修正につながるような介入は、「09 春」に比べると、かなり減っていた。それは、討論会に対する誤解の解消、リーダーによるクラス活動の進行、イベントのテーマに再考を要するような問題がなかったこと等の理由による。

直接的な関与・介入を伴わない行動としてのクラス活動の内容の検討も、リーダーがあらかじめその日の予定を考え、クラスのメンバーに周知していたため、ほとんど行っていない。代わりに、執行部を設置したものの、大人数での話し合いはなかなかうまく進まなかったことから、私たちは主に問題解消に向けた関与・介入、及び仕掛けの検討を行っている。

約 30 人のメンバーで話し合いを進めていくのは、困難が予想される。イベント自体も全員で一つのイベントをやれるのかどうか。話し合いがどのような展開になるかわからないが、ある程度方策を検討しておいて、場合によってはこういう方法もあるという提案を行ったほうがいいかもしれない。（091015 授業記録\_コメント）

また、問題意識の共有への強いこだわりに基づく関与・介入、及び仕掛けの検討も行っている。

問題意識にもとづく目的を共有しなければ、単に一緒に何かをするだけでは関係は生まれないのではないか。来期に向け、どうクラス内で問題意識を共有していくか、考える必要がある。具体的には、こういう問題意識を持った人、という集め方をするか、問題意識を掘り起こすことに時間をかけるか、ということが考えられる。（091217 授業記録\_ミーティング）

私たちは、問題解消を図るのは担当者の役割という認識のもと、上記のような仕掛けの検討を行う一方で、スムーズにいくよう担当者がルールを敷くことは、学習者が主体的にクラス活動を進めていくことと相反するのではないかという懸念を抱く。

最初は、担当者主導で最初にグループ分けして企画案を立てさせるようにしたほうがいいのかも。ただ、そうすればうまく進むかもしれないが、それがいいかというと、そうとも言えない。（091126 授業記録\_ミーティング）

以上述べたように、私たちは、「09 秋」においても、「09 春」と同様、「イベント企画プロジェクト」において担当者はクラス活動の見守り役であると同時に、環境整備、注意・確認・アドバイス、クラス活動の方向づけ、軌道修正、問題解消を行う役割を担う存在であると捉えていた。加えて、2 学期にわたる実践の中から、学習者が問題意識を共有することや大人数での話し合いをまとめていくことは困難であるという問題点が見えてきたことから、問題解消のためには、何らかの仕掛けを施す必要があり、最初はある程度担当者主導で進めたほうがいいのかと考えるようになった。しかし、あらかじめ問題解消のための対策を組み込み、クラス活動がうまく進むようにする行為は、学習者が問題にぶつかるたびに自分たちで乗り越えていくことを重視する考えと矛盾する。私たちはその矛盾と対峙しながら、「イベント企画プロジェクト」における担当者の役割を模索していた。

### 4-3. 2010 年度春学期「イベント企画プロジェクト」(以下「10 春」)

#### 4-3-1. 実践概要

■期間：2010 年 4 月 8 日～7 月 22 日 (週 1 コマ = 90 分×15 週)

■クラス参加者：学習者 18 名 (うち 2 名は「09 春」履修者, 3 名は「09 秋」履修者),  
日本人学生ボランティア 2 名, 担当者 1 名, TA1 名

■クラス活動の流れ：

クラス活動開始当初に担当者から次の二つの課題を提示した。①お互いの名前を覚える。②企画グループを作る。①②とも、リピーター学生(再履修者)を中心に実施された。また、クラス活動初期にリピーター学生からの発案により、親睦を目的としたピクニックが行われた。また、「09 秋」終了後に行われた担当者によるリフレクションにより、次の二つの問題点が指摘されていた。(1) クラスのメンバーがクラス外に開かれたイベントを企画し、開催するというのをイメージするまでにかなりの時間がかかった。(2) クラスのメンバーが発案するイベントの形態と内容に関するアイデアが貧困だった。私たちは、(1) (2) の問題点を踏まえ、クラス活動初期に ICC (国際コミュニティセンター) の学生スタッフ<sup>6)</sup>によるイベント企画の手順に関するレクチャーを実施した。その後、企画グループごとに企画案を検討した上で、企画案をプレゼンテーションした。プレゼンテーション後、投票により、イベント企画を決定した。決定した企画のテーマは「国際恋愛」である。イベント企画決定後、五つの役割班が編成され、イベントの企画、及び準備が進められた。7 月 3 日に行われたイベント、「ハニーは外国人一留学生たちが話す国際恋愛―」には、クラス外の日本人学生、留学生等、十数名の参加があった。イベントは、ゲーム→ビデオ(国際恋愛の際に起こりやすい問題を寸劇風にまとめた作品)視聴 1→議論 1→ビデオ(留学生等に対する国際恋愛に関するインタビューをまとめた作品)視聴 2→議論 2、という流れで行われた。

#### 4-3-2. 2010 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

私たちは、「10 春」のオリエンテーションにおいて、「イベント企画プロジェクト」に関し、次のように説明している。

古屋：普通の授業であれば、授業の時間だけ教室に来て、教室で座っていればいい。しかし、この授業は違う。イベントは、授業外の時間で行われる。また、授業外の時間にイベントの準備をすることもある。この授業で一番大切なのは、積極的に参加すること。積極的に参加しなければ、この授業を取っても、何も得られない。だから、先生に何かを教えてもらいたいという人には、この授業は向いていないと思う。しかし、みんなで協力して、イベントを企画・実施するのは、何だか楽しそうだと思う人にはいいかもしれない。(100408 授業記録\_授業内容)

この説明の中で、私たちは、「イベント企画プロジェクト」においては、主体的な参加(「この授業で一番大切なのは、積極的に参加すること。」)と協働(「みんなで協力して、イベントを企画・開催する」)が重要であることを強調している。このような説明を行う背景には、「09 春」を対象とする研究(古賀・三代・古屋 2010a)があったと推測される。古賀・三代・古屋(2010a)において、私たちは、クラス活動への「主体的参加」がコミュニティのメンバーとしての当事者意識の共有とクラス活動を行うために協働しようという協働意識の共有により実現するという気づきを得た。「10 春」冒頭に行われた説明には、この主体的参加を支える当事者意識の共有と協働意識の共有という気づきが踏まえられている。

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

「10 春」に特徴的な事象として, リピーター学生が存在が挙げられる。私たちは, リピーター学生が主体的にクラス活動を進める様子に接し, 次のような気づきを得た。

リピーターの関わりを見て, 前回の問題点を踏まえたうえで, このように進めていこうという意識をもって参加している人がいることが, この活動を進めていく原動力になると感じた。このクラスに必要なのは, いかにして活動を進めていくか, 動かしていくか, ということに対する強い問題意識なのかもしれない。(100415 TA 報告書\_コメント)

4-1-2, 4-2-2 で述べたように, 「09 春」, 「09 秋」において, 私たちは, 学習者が話し合いを通じて, 問題意識を共有することを実践の柱の一つとしていた。ここで言う問題意識と上記の引用中の問題意識では, その内実が異なる。前者の問題意識は, 学習者が留学生として大学生活を送る中で感じる様々な違和感をもとに生まれる問題意識, 具体的には, 自分たち留学生は, 大学コミュニティにおいて周辺化されていると認識し, それを問題であると意識することであった。1. で述べたように, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」を立ち上げる際, 日本人学生と話す機会が少ないという留学生の声から, 大学コミュニティにおいて留学生が周辺化されており, それが問題であると考えていた。そして, 留学生自身も, 同様の認識を持っているであろうと考えていた。しかし, 4-1-2 で述べたように, 「09 春」, 「09 秋」を通して, 問題意識の共有, すなわち, クラスのメンバーが留学生が大学コミュニティにおいて周辺化されていると認識し, それを問題であると意識することが非常に困難であることが明らかになった。また, 4-2-2 で述べたように, 「09 秋」を通して, 私たち同様, 留学生も大学コミュニティにおける留学生の周辺化を問題であると認識しているであろうという前提に疑いが生じた。そして, 私たちは, 大学コミュニティにおける留学生の周辺化という担当者の問題意識を, 学習者にも共有させようとしていたことに気づいた。

後者(上記の引用中)の問題意識は, 自分たちがイベントを企画し, 開催するためにどのように活動を進めていくかという問題を意識することである。自分たちがイベントを企画し, 開催するためにどのように活動を進めていくかという問題は, 学習者がイベント企画を進める中で必然的に発生する。しかし, 発生する問題を自分たちの問題であると意識するためには, クラス活動への主体的参加が不可欠である。リピーター学生は, 「09 秋」のイベントの企画・開催が上手くいっていなかったと認識し, 「09 秋」の上手くいかなかった点を改善したいという思いを持ち, 主体的に「10 春」に参加していた。そのため, 「10 春」開始当初より, リピーター学生は, 自分たちがイベントを企画し, 開催するためにどのように活動を進めていくかという問題を自分たちの問題として意識していた。

上述したように, 「09 春」, 「09 秋」には, 私たちは「イベント企画プロジェクト」という実践を, クラスのメンバーが大学コミュニティにおいて留学生が周辺化されているという私たちの問題意識を共有した上で, イベントを企画・開催する活動であると捉えていた。しかし, 「10 春」において, リピーター学生が主体的にクラス活動を進めていく様子に接し, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」という実践を, 学習者がイベントを企画・開催するという仕事を協働で主体的に遂行する活動であると捉えるようになった。

#### 4-3-3. 2010 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

「10 春」にリピーター学生が登場したことにより, 私たちはより確信を持って, 「イベント企画プロジェクト」の教室を当該学期のクラスのメンバーではない学習者をもメンバーとするコミュニ

ティであると捉えるようになった。

リピーターの学生が「このクラスがどんなに得がたいクラスであり、今学期、自分がこのクラス（活動）をどのようにしていきたいか」を熱っぽく語る姿を見たとき、このクラスが学期ごとに区切られるタイプのクラスではなく、継続性を持った活動体であることを実感した。(100408 授業記録\_コメント)

4-2-3 で述べたように、私たちは、「09 秋」において、過去にクラスのメンバーであった学習者とのつながりを作っていこうという着想、すなわち、クラスのメンバーの学期を越えたつながりという着想を得ていた。しかし、つながり方に関する具体的なイメージは持っていなかった。リピーター学生の登場により、私たちは、クラスのメンバーの学期を越えたつながりを具体的にイメージできるようになった。その結果、「イベント企画プロジェクト」の教室は、学期ごとに区切られたコミュニティではなく、時間的な広がりを持ったコミュニティであると実感するようになった。

また、4-3-1 で述べたように、「10 春」より ICC の学生スタッフによるイベント企画の手順に関するレクチャーが行われるようになった。レクチャーを実施してみて、私たちは、次のような手ごたえを得た。

ICC の山田さん（仮名）からは、今後も協力していただけるというお話をいただいた。いい協力関係を築いていけそうな手ごたえがあった。大いに期待したい。(100422 TA 報告書\_コメント)

ICC の学生スタッフによるレクチャーは、「09 秋」までのリフレクションを踏まえ、学習者以外に開かれたイベントの企画・開催をイメージしてもらうことを意図し、始められた。私たちは、ICC のスタッフとのやりとりを通して、「いい協力関係を築いていけそうな手ごたえ」を得た。そして、次のように ICC との「継続的なつながり」を志向するようになった。

今回、ICC とつながりを持ったことにより、広範囲にわたる広報や学内外から取材が実現したことは喜ばしいことである。(中略)「イベント企画プロジェクト」が ICC や協賛店と継続的なつながりを維持していくことにどのような可能性があるかを検討する必要がある。(100701 授業記録\_ミーティング)

4-2-3 で述べたように、「イベント企画プロジェクト」の教室を空間的に拡張する可能性を持つコミュニティとして捉えるという着想は、すでに「09 秋」に得ていた。「10 春」に上述した ICC との連携が始まったことにより、私たちは、「イベント企画プロジェクト」の教室を固定的で閉じられたコミュニティではなく、他の様々なコミュニティとつながり、空間的に拡張する可能性を持つコミュニティであると実感するようになった。

#### 4-3-4. 2010 年度春学期「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

「10 春」開始当初にも、「09 春」、「09 秋」と同様に、私たちはクラス活動に対し積極的な関与・介入は行わないという態度を表明した。

教師は話し合わない、決定しない、計画しない、実行しない、何もしない。座っているだけ。(100408 授業記録\_授業内容)

4-3-2 で述べたように、「10 春」は、開始当初からリピーター学生がクラス活動を牽引していた。そのため、私たちがあえて関与・介入せずとも、クラス活動が進行していった。リピーター学生がクラス活動を牽引する様子を見て、私たちは、「イベント企画プロジェクト」における担当者の役割に関し、次のような感想を抱いた。

## 古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

シーラさん（仮名）を中心とするリピーター学生は、「今後プロジェクトをどのように進行するか」「進行するにあたり、クラスの時間をどのように使うか」ということをある程度、考慮しているようである。こうなると、担当者が「次の授業では何をするか」と考えること自体が、本クラスにおいては最早ナンセンスであるように思えてくる。（100506 授業記録\_コメント）

だからといって、担当者は必要ないかという点、そうではなく、そこにいることで、雨風をしのげる屋根のように、何があっても大丈夫という安心感を与える存在になっているのではないかと思う。ようやく、これまでたびたび話してきた部活の顧問になってきた感がある。（100506 TA 報告書\_コメント）

「イベント企画プロジェクト」開始当初より、私たちは、一貫して担当者はクラス活動に積極的に関与・介入しないという方針を採ってきた。なぜなら、担当者の関与や介入は、学習者が自分たちで問題に気づき、協力して問題を解決する経験を通して学ぶ機会を奪う行為であると考えていたからである。ところが、4-1-4、4-2-4ですでに記述したように、実際には幾度も関与・介入が検討され、実施された。「10春」においても、引き続き関与・介入は実施された。しかし、関与・介入の仕方に質的な変化が見られるようになった。具体的には、関与・介入の仕方に関し、次のように考えるようになった。

本授業においては、目的そのものに対し、その問題性を指摘するというアプローチは有効ではない。その目的でイベントを行った場合、具体的にどんな問題が起こり得るかということを描き、指摘を踏まえ目的そのものが再考されることを期待するというアプローチを取る必要がある。（100527 授業記録\_ミーティング）

「10春」において、私たちは、学習者から特に問題視されることなく、国際交際（結婚）経験者に対する興味本位な関わりやステレオタイプを助長するような異文化理解といったイベントの目的が挙がってくるという場面に遭遇した。その際、私たちは、次のように考えた。このような場合、担当者がイベントの目的そのものに異議を唱えても、学習者には理解されにくい。企画の内容に即し、具体的に提案、あるいは指摘を行うことにより、担当者の提案や指摘はアドバイスとして有効に機能する。例えば、国際交際（結婚）経験者に経験談を聞き、楽しむといったイベントの目的に異議を唱えるよりも「イベントに招かれた国際交際（結婚）経験者が好奇の目にさらされ、不愉快な思いをする可能性があるのではないか。そもそも国際交際（結婚）経験者がそのような形でのイベントへの参加を望むのか」といった具体的な問題点を指摘したほうがアドバイスとして有効に機能する。

「09秋」までに見られたイベントの目的に異議を唱えるような介入を問題意識への介入であるとするならば、上述した企画の内容に即した具体的な提案・指摘は、企画内容への関与であると言える。「09春」、「09秋」において、私たちは、問題解決のための討論会をイベントとして行うというクラス活動の目的に強いこだわりを持っていた。そのこだわりが「総合活動型日本語教育」に長く携わってきた経験に由来することは、4-1-4で述べたとおりである。しかし、「10春」に至り、クラス活動の目的への強いこだわりは徐々に薄れ始めた。そのきっかけとなったのは、4-3-2で述べたリピーター学生によるクラス活動への主体的参加である。リピーター学生が自分たちなりにイベントの目的を立て、イベントの企画を進めていく姿を見て、私たちは、一方でクラス活動の全てを学習者に委ねると言いながら、一方でイベントを企画する目的に関しては学習者に委ねていないという矛盾を実感するようになった。そして、次のように考えるようになっていった。学習者が主体的にイベント企画を進めていくことを重視するのであれば、できるだけ学習者から出て来たアイディ

アを尊重する姿勢が有効ではないか。学習者から出て来たアイデアに異議を唱えることは、学習者の主体性を阻害し、動機づけを下げる行為ではないか。

私たちは、「10春」にも、「09春」、「09秋」と同様、基本的にクラス活動の見守り役というスタンスでクラス活動に関わった。「09春」、「09秋」には、クラス活動の見守り役に徹することに迷いがあった。そのため、状況に応じ、クラス活動の方向づけ、注意・確認・アドバイス、軌道修正、問題解消を行う役割を担っていた。しかし、「10春」にリピーター学生の主体的な参加を目的にすることににより、「09春」、「09秋」に私たちが抱いていたクラス活動の見守り役に徹することへの迷いは徐々に薄れ、クラス活動の見守り役に徹することに確信が持てるようになった。また、それに伴い、私たちは、企画内容に対する注意・確認・アドバイスを行うという役割を担うようになった。反対に、クラス活動の方向づけ、軌道修正、問題解消を行う役割は、徐々に後退していった。

#### 4-4. 2010年度秋学期「イベント企画プロジェクト」(以下「10秋」)

##### 4-4-1. 実践概要

■期間：2010年9月30日～2011年1月28日(週1コマ＝90分×15週)

■クラス参加者：学習者10名、日本人学生ボランティア4名、担当者1名、TA1名

■クラス活動の流れ：

「10春」のクラス活動の流れを踏襲し、「10秋」もクラス活動初期に担当者から次のような課題を提示し、学習者が実施した。①お互いの名前を覚える。②企画グループを作る。また、「10春」同様、担当者主導により、クラス活動初期にICCの学生スタッフによるイベント企画の手順に関するレクチャーが行われた。更に、「10春」の学習者に自分たちのイベント企画の手順を紹介してもらった。その後、企画グループごとに企画案を検討した上で、企画案をプレゼンテーションした。プレゼンテーション後、投票により、イベント企画を決定した。決定した企画は「国際貿易ゲーム」<sup>7)</sup>である。企画決定後、五つの役割班が編成され、役割班の班長から、リーダー(1名)と執行部(4名)が選出された。その後、リーダーと執行部を中心にイベントの企画、及び準備が進められた。企画、及び準備の過程で、「国は一国じゃ成り立たない」というイベントテーマが決定した。1月14日に行われたイベント、「国際貿易ゲーム―国は一国じゃ成り立たない―」には、クラス外の日本人学生、留学生等、28名の参加があった。イベントは、チーム分け→国際貿易ゲームのルール説明→国際貿易ゲーム→ビデオ(ゲーム中の参加者の様子をまとめた作品)視聴→結果発表→ゲームの振り返りという流れで行われた。

##### 4-4-2. 2010年度秋学期「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

4-3-2, 4-3-4で詳しく述べたように、「10春」のクラス活動は、リピーター学生が牽引した。しかし、「10秋」にはリピーター学生がいなかったため、私たちは「10秋」開始当初、「リピーター学生なくして、学習者のイベント企画への主体的参加が実現されるだろうか」と心配していた。が、予想に反し、学習者はクラス開始当初から主体的にイベント企画に取り組み始めた。「10春」に続き、学習者が主体的にイベント企画に取り組む様に接したことにより、私たちは、「イベント企画プロジェクト」という実践を、確信を持って、学習者がイベントを企画・開催するという仕事を協働で主体的に遂行する活動であると捉えるようになった。

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

#### 4-4-3. 2010 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

学期開始当初, 担当者が「10 春」のクラスのメンバーに向け, 自分たちがどのようにイベントを企画し, 開催したかを説明に来てほしいと依頼したところ, 「09 秋」, 「10 春」の履修者であるパクさん(仮名)が説明に来てくれた。パクさんの説明を聞き, 私たちは次のような感想を抱いた。

パクさんの説明がすばらしかった。担当者が伝えたいような内容を漏らさず話していた。おそらく同じ内容を担当者が話しても, 学生にあまり響かないのではないかと。同じ学生先輩が自分の経験を交えて話すことに意味があったと思う。(101007 授業記録\_ミーティング)

パクさんという「10 春」のクラスのメンバーが, イベント企画経験の伝授を媒介として, 「10 秋」のクラスのメンバーとつながったことにより, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」の教室を, 確信を持って時間的な広がりを持ったコミュニティであると捉えるようになった。

また, 「10 秋」にも「10 春」と同様, ICC の学生スタッフにイベント企画に関するレクチャーやイベントの広報への協力等を依頼した。ICC との連携が継続したことにより, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」の教室を, 確信を持って他の様々なコミュニティとつながり, 空間的に拡張する可能性を持つコミュニティであると捉えるようになった。

#### 4-4-4. 2010 年度秋学期「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

私たちは, 「10 秋」も, 「10 春」同様, 基本的にクラス活動の見守り役に徹するとともに, 主に企画内容に対する注意・確認・アドバイスを行うという役割を担った。「10 秋」には, 次のような企画内容に対する注意が検討されたことがあった。

今回の「イベント企画決定」において, 担当者は, どのような企画に決定したとしても, 基本的に介入せず, 傍観する。ただし, 「冬の大運動会」に決定した場合は, その場でセンター事務所に授業内の活動として「運動会」を実施することが可能か否かを問い合わせる。実施が不可能である場合は, その旨学生に伝える。(101104 授業記録\_ミーティング)

「10 秋」に行なわれたイベント企画のプレゼンテーションにおいて, 「冬の大運動会」というイベント企画が提案された。その際, 私たちは次のように考えた。運動会をイベントとして行った場合, 怪我人が発生する危険性がある。私たちは, 危険を未然に防ぐために, 担当者がイベントの安全を確保するための指摘を行う役割を担うべきではないか。そこで, 私たちは, 当該のイベント企画が内包する危険性に関し, 学習者に指摘するか否かを検討した。結局, 「10 秋」に行うイベントが「国際貿易ゲーム」に決定したため, 企画内容に対する注意は検討したのみで, 実際には行わなかった。

#### 4-5. 2011 年度春学期「イベント企画プロジェクト」(以下「11 春」)

##### 4-5-1. 実践概要

■期間: 2011 年 5 月 12 日～8 月 4 日(週 1 コマ = 90 分×13 週<sup>8)</sup>)

■クラス参加者: 学習者 6 名, 日本人学生ボランティア 1 名, 担当者 1 名, TA1 名

■クラス活動の流れ:

クラス活動初期には, 「10 春」, 「10 秋」と同様, 名前覚え→企画グループの編成→ICC の学生スタッフによるイベント企画の手順に関するレクチャー→企画グループごとに企画案の検討→プレ

ゼンテーションという流れで進化した。「11 春」は、クラスのメンバーが少なく、イベント企画グループが二つしか編成されなかったためか、いずれかのイベント企画を選択するのでなく、二つのイベント企画を融合させることになった。その後、クラスのメンバー全員で話し合いを進めた結果、「国際夏祭り」というイベント企画が決定した。少人数であったためか、前学期までとは異なり、役割班の編成は行われなかった。クラスのメンバー全員で話し合い、具体的な作業が発生した際、誰かが当該の作業を担うという手順でイベントの企画、及び準備が進められた。その過程で、「友達を作ろう」というイベントテーマが決定した。7月15日に行われたイベント、「国際夏祭り」には、クラス外の日本人学生、留学生等、延べ50名近くの参加があった。イベントは、チーム分け→各種ゲームの実施→結果発表、表彰式という流れで行われた。

#### 4-5-2. 2011 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

「11 春」も「10 秋」と同様、リピーター学生はいなかった。しかし、クラスのメンバーが少なく、関係が作りやすかったということもあってか、学習者はクラス開始当初から主体的にイベント企画に取り組んだ。そのため、私たちも、「10 春」、「10 秋」同様、終始確信を持って、「イベント企画プロジェクト」という実践を、学習者がイベントを企画・開催するという仕事を協働で主体的に遂行する活動であると捉えていた。

#### 4-5-3. 2011 年度春学期「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

「11 春」には、時間的な広がりを持ち、空間的に拡張する可能性を持つコミュニティとしての教室という観点から見て、特筆すべき二つの動きがあった。

一つは、Facebook の活用である。私たちは、「11 春」開始前に Facebook 上に「イベント企画プロジェクト OP 会」というグループを開設し、これまでに「イベント企画プロジェクト」を履修した学習者、及び関わりのあった人たち（ICC 学生スタッフ、ボランティア等）を可能な限りメンバーとして登録した。Facebook 内に「イベント企画プロジェクト OP 会」というグループを開設したことにより、過去に「イベント企画プロジェクト」に関わっていた人々と現在「イベント企画プロジェクト」に関わっている人々のつながり、すなわち、学期を越えたつながりが可視化されることになった。また、当該学期のクラスのメンバーと過去のクラスのメンバーが、直接コンタクトを取ることも容易になった。現在までのところ、当該学期のクラスのメンバーと過去のクラスのメンバーの間で活発な交流が行われているとは言い難い。しかし、例えば、「イベント企画プロジェクト OP 会」のウォールに掲載されたイベント情報を見て、過去のクラスのメンバーがイベントに参加するなど、ゆるやかなつながりの場となっている。

もう一つは、イベント参加者がイベント企画者になるという動きである。「11 春」のクラスのメンバーのうち2名が「10 秋」に行われたイベント「国際貿易ゲーム」に参加していた。彼らは、「国際貿易ゲーム」に参加したところ、とても楽しかったので、今度は自分が企画する側になってみたいと思い、履修したとのことであった。

私たちは、「10 春」以降、確信を持って、「イベント企画プロジェクト」の教室を時間的な広がりを持ち、空間的に拡張する可能性を持つコミュニティであると捉えるようになった。上述した二つの動きから、私たちは、そうしたコミュニティが徐々に形成されつつあることを強く実感した。

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

#### 4-5-4. 2011 年度春学期「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

私たちは、「11 春」も、「10 春」, 「10 秋」同様, 基本的にクラス活動の見守り役に徹した。また, 「11 春」においても, 「10 春」, 「10 秋」同様, 企画内容に対する注意・確認・アドバイスを行うという役割を担った。「11 春」には, 次のような企画内容に対する注意を検討し, 実施した。

1. 現在, 構想されているイベントには, 次のようなリスクがあることを伝える。  
 ①食品提供→食中毒, ②食品調理→火事, ③スポーツ→怪我  
 ・許可: ①②③いずれも, 行うにあたり, 施設の許可を得る必要があるため, 場所の確保が難しくなる。  
 →みなさんは, 友達と遊びに行くわけではなく, 不特定多数の人が参加するイベント主催者という責任ある立場にある。
2. タイトル, テーマ, メッセージがあいまいなまま, イベント内容に関する議論が進んでいるようなので, タイトル, テーマ, メッセージの明確化を求める。(110602 授業記録\_ミーティング)

4-4-4 で述べたように, 私たちは, 「10 秋」にも当該のイベント企画が内包する危険性に関して, 指摘するか否かを検討した。しかし, 検討したものの, 実際には行わなかった。「11 春」には, 危険性を内包するようなイベント企画が進行しそうになったことから, 私たちは, 危険を未然に防ぐため, イベントの安全を確保するための指摘を行った。

4-5-3 で述べたように, 私たちは, 「11 春」開始前に Facebook 上に「イベント企画プロジェクト OP 会」というグループを開設した。「イベント企画プロジェクト OP 会」の開設は, 過去に「イベント企画プロジェクト」に関わっていた人々と現在「イベント企画プロジェクト」に関わっている人々をつなげることを意図していた。また, 「10 春」から行うようになった ICC との連携は, もともと学習者に外に開かれたイベントの企画・開催をイメージしてもらうことを目的として始まった。つまり, ICC との連携には, 「09 春」, 「09 秋」における問題点を改善するという意図があった。しかし, 連携を継続する中で, 私たちは, 徐々に「イベント企画プロジェクト」というコミュニティを他のコミュニティとつなぐという動きの一環であると感じるようになった。以上のような動きを通して, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」の教室というコミュニティの時間的な広がりや空間的な拡張を促すこともまた, 担当者の役割であると捉えるようになった。

## 5. まとめと考察

以上, 「イベント企画プロジェクト」の実践観, 及び教室観, 「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容を 5 学期にわたり記述した。私たちの実践観・教室観・教師観の変容は, 以下のようによまとめられる。

### 1) 「イベント企画プロジェクト」の実践観の変容

「09 春」には, 私たちは, 「イベント企画プロジェクト」という実践を, 大学コミュニティにおいて留学生が周辺化されているという問題意識に基づき, 留学生の問題を解決するための討論会を開催することを目的とする場と捉えていた。そして, その目的を実現するためには, クラスのメンバーが, 留学生が周辺化されているという問題意識を共有する必要があると考えていた。「09 秋」に, 「イベント企画プロジェクト」の目的は, 留学生の問題を解決するための討論会の開催からイベントの企画・開催へと転換した。その一方で, 私たちは「09 春」同様, 留学生が周辺化されているという問題意識をクラスのメンバーが共有することが必要であると考えていた。しかし, 「09

春」,「09 秋」を通して,問題意識の共有,すなわち,クラスのメンバーが留学生が周辺化されていると認識し,それを問題であると意識することが,非常に困難であることが明らかになった。そこで,私たちはどのようにして問題意識を共有させるかという議論をたびたび行った。また,「09 秋」を通して,留学生も私たち同様,大学コミュニティにおける留学生の周辺化を問題であると認識しているであろうという前提に疑いが生じた。そして,私たちは,大学コミュニティにおける留学生の周辺化という担当者の問題意識を,学習者にも共有させようとしていたことに気づいた。そこで,私たちは,「イベント企画プロジェクト」という実践とはどのような実践に関し,改めて考え始めた。「10 春」において,リピーター学生がクラス活動へ主体的に参加する姿を目の当たりにしたことにより,私たちは,「イベント企画プロジェクト」という実践を,私たちの問題意識が反映されたイベントの企画・開催を意図する活動としてではなく,学習者がイベントを企画・開催するという仕事を協働で主体的に遂行する活動として捉えるようになった。「10 春」以降も,引き続き,「イベント企画プロジェクト」という実践を,学習者がイベントを企画・開催するという仕事を協働で主体的に遂行する活動として捉えている。

## 2)「イベント企画プロジェクト」の教室観の変容

「09 春」には,「イベント企画プロジェクト」の教室は一つのコミュニティであり,学習者がクラス活動を通してコミュニティの形成とコミュニティへの参加を経験する場と捉えていた。「09 秋」も「09 春」に引き続き,「イベント企画プロジェクト」の教室をコミュニティと捉えていたが,新たに時間的な広がりを持ち,空間的に拡張する可能性を持つコミュニティと捉えるという着想を得た。「10 春」には,リピーター学生がクラス活動に主体的に参加したことにより,「イベント企画プロジェクト」の教室は,学期ごとに区切られたコミュニティではなく,時間的な広がりを持ったコミュニティであるという確信を得た。また,「10 春」に始めた ICC との連携を通して,私たちは,「イベント企画プロジェクト」の教室を固定的で閉じられたコミュニティではなく,他の様々なコミュニティとつながることにより,空間的に拡張する可能性を持つコミュニティであるという確信を得た。「10 春」以降も,引き続き,「イベント企画プロジェクト」の教室を時間的な広がりを持ち,空間的に拡張する可能性を持つコミュニティと捉えている。

## 3)「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容

「09 春」,「09 秋」には,私たちは「イベント企画プロジェクト」において担当者はクラス活動の見守り役であると捉えていた。その一方で,環境整備,注意・確認・アドバイス,クラス活動の方向づけ,軌道修正,問題解消を行う役割を担う存在であるとも捉えていた。しかし,担当者がそうした役割を担うことは,学習者が協働で問題を乗り越えながら主体的にクラス活動に参加することを阻むことにつながりかねない。私たちは,クラス活動の見守り役という役割と,環境整備,注意・確認・アドバイス,クラス活動の方向づけ,軌道修正,問題解消を行う役割という互いに相反する役割を同時に担うことに矛盾を感じるようになった。「10 春」において,私たちは,リピーター学生の主体的な参加を目の当たりにした。これにより,「09 春」,「09 秋」に私たちが抱いていたクラス活動の見守り役に徹することへの迷いは,徐々に薄れ,クラス活動の見守り役に徹することに確信が持てるようになった。また,それに伴い,私たちは,企画内容に対する注意・確認・アドバイスを行うという役割を担うようになった。反対に,クラス活動の方向づけ,軌道修正,問題解消を行う役割は,徐々に後退していった。「10 春」以降も,引き続き,担当者はクラス活動の見守り役に徹しつつ,状況に応じて注意・確認・アドバイスを行う役割を担う存在であると捉えている。更に,

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

「イベント企画プロジェクト」の教室というコミュニティの時間的な広がりや空間的な拡張を促す役割を担う存在であるとも捉えている。

以上のような私たちの「イベント企画プロジェクト」の実践観, 及び教室観, 「イベント企画プロジェクト」における教師観の変容は, 私たちがこれまで5学期にわたり「イベント企画プロジェクト」という実践を進めながら行ってきた, 次の二つのあり方によるリフレクションによりもたらされた。一つは, 実践の現状を把握するリフレクションである。実践の現状を把握するリフレクションは, 当該学期の実践を行っている最中, または, 次学期の実践を計画する際に, 授業記録の記述, TA 報告書の記述, ミーティングという形態で行われた。私たちは, 実践の現状を把握するリフレクションを通して実践における問題点を見出し, 見出された問題点を解決する方策を検討した。もう一つは, 実践の構造を把握するリフレクションである。実践の構造を把握するリフレクションは, 当該学期の実践終了後, 一定の時間を置き, ある程度長い時間をかけて行われた。主に質的な分析手法を用い, 実践に関する質的なデータ(記述による実践の記録, 録音・録画による実践の記録, 参加者へのインタビュー等)を分析することを通して, 実践における参加のプロセス, 学びの構造, コミュニティ変容のプロセス等を可視化しようとした。実践の構造を把握するリフレクションにより可視化された実践の構造は, 学会発表や論文投稿という形態で公開した。

実践の現状を把握するリフレクションと実践の構造を把握するリフレクションは, 相互に関連しており, 切り離すことができない。私たちは, 実践の現状を把握するリフレクションにより, 実践の問題点を見出した。そして, 解決策を考案し, 問題に対処しようとした。実践を進めていくためには, 様々な問題点に, その都度対処せざるを得ない。しかし, 問題点に対処しながらも, どこか「本当にそういう対処でよかったのか。問題点のみにフォーカスするのではなく, もっと一つの学期の実践全体の中で何がどのように起こっていたかという全体像を把握する必要があるのではないか」と思っていた。そうしたある種の違和感が, 私たちを実践の構造を把握するリフレクションへと向かわせた。実践を行う中で私たちが問題であると感じた点が, 実践の構造を把握するリフレクションの観点となった。例えば, 「09 春」における最大の問題点は, 「学習者が問題意識を共有できない」という点であった。そのため, 私たちは, 「問題意識の共有」を観点とし, 実践の構造を把握するリフレクションを行った。その結果, 「『交渉や摩擦の経験』が人間関係を作り, イベントを作るという実践自体が先に共有され, いいイベントを作るということ自体があとから問題意識として共有され, その解決・達成へ向かって, 徐々に学習者が主体的になった」(古賀・三代・古屋 2010c, p. 94) というプロセスが可視化された。可視化された実践の構造は, 実践の現状を把握するリフレクションの観点の一つとなる。例えば, 「09 春」を対象とする実践の構造を把握するリフレクションにより可視化された「実践自体の共有」→「問題意識の共有」→「主体的参加」というプロセスは, 「学習者が既に持っている問題を共有することで, その問題の解決に向けて実践を立ち上げることができる」(古賀・三代・古屋 2010c, p. 94) と考えていた私たちに, 実践の現状を把握するリフレクションの観点の変容を促した。その結果, 「10 春」においては, 実践の現状を把握するリフレクションの観点が「問題意識の共有」から「主体的参加」へと移行した。実践の現状を把握するリフレクションの観点が質的に変化したことにより, 「09 春」における最大の問題点であった「学習者が問題意識を共有できない」という点は, 「10 春」においては問題視されなくなった。その結果, 私たちの「イベント企画プロジェクト」における教師観は, 環境整備, 注意・確認・アドバイス, クラス活動の方向づけ, 軌道修正, 問題解消を行う役割を担う存在から, クラス活動

の見守り役に徹しつつ、状況に応じて注意・確認・アドバイスを行う役割を担う存在、かつ「イベント企画プロジェクト」の教室というコミュニティを他の様々なコミュニティとつなげ、拡張を促す存在へと変容した。

以上のように、私たちは、二つのあり方によるリフレクションを行き来しながら、「イベント企画プロジェクト」という実践を継続して来た。具体的には、実践の現状を把握するリフレクションにより得られた観点で実践の構造を把握するリフレクションを行い、そのリフレクションにより得られた観点により、次の実践の現状を把握するリフレクションを行うというサイクルを継続してきた。その結果、「イベント企画プロジェクト」を支える私たちの価値観は、徐々に変容していった。

どのような日本語教育実践であれ、通常、教師は、実践の現状を把握するリフレクションを行い、問題点を発見し、発見した問題点を改善しながら、実践を継続する。しかし、実践の現状を把握するリフレクションのみにより実践を継続した場合、どうしても教室における学習者と教師の関係や授業内容・学習方法等が固定的になりがちである。なぜなら、実践の現状を把握するリフレクションにおいては、当該の実践を支えている価値観（実践観、教室観、教師観等）が問われないからである。教師の価値観が問われず、価値観の意識化や問い直しが行われないまま実践が継続された場合、実践を支える価値観は固定化し、強固になり、変容の余地を失う。その結果、当該の実践は、ダイナミックさを失い、硬直化する。上述した実践の現状を把握するリフレクションと実践の構造を把握するリフレクションを行き来することは、この硬直化に抗う手段の一つとなる。二つのあり方によるリフレクションを行き来することにより、教師はより多様な観点から実践、教室、教師の役割等を捉えられるようになる。そして、実践を支える価値観を常に問い直し、捉え直し、変容させ、変容した価値観のもとで実践を再デザインする。このようなサイクルの継続により、日本語の教室は、可変的でダイナミックな言語教育が展開される場となるはずである。

## 注

- 1) 「イベント企画プロジェクト」という科目の担当者は1名である。しかし、筆者らは、次の二つの経緯から、「イベント企画プロジェクト」を3名全員の実践であると捉えている。  
①毎回の授業後には、3名でミーティングを行い、実践の方向性を決定した。②実践の構想・計画・実施、いずれの段階においても、常に3名で検討し、決定した。上述したような実践者の捉え方により、以下、「イベント企画プロジェクト」の実践者を表す呼称として、「私たち」を用いる。
- 2) 2009年度春学期、秋学期の科目名は、「討論会プロジェクト」であった。しかし、「討論会」という言葉からディベートをイメージし、クラス活動の内容がなかなか理解できない学習者が多かった。そこで、2010年度春学期に科目名を「イベント企画プロジェクト」に変更した。以降、2011年度秋学期まで「イベント企画プロジェクト」を科目名としている。
- 3) 日本語科目を履修する学習者は、1レベル（初級前半）から8レベル（上級後半）にプレイスメントされる。「6-8」は、6レベル（中上級）から8レベル（上級後半）の学習者が履修する科目であることを表す。
- 4) アクシオンリサーチに関しては、Kemmis, S. & McTaggart, R. (1988)、三代・古屋・古賀・寅丸・長嶺・武・市嶋（2011）を参照のこと。
- 5) 「09春」, 「09秋」: 担当者=古賀, TA=三代。「10春」以降: 担当者: 古屋, TA=古賀。

古屋憲章, 他／クラス担当者の実践観, 教室観, 教師観はどのように変容したか

- 6) ICC (国際コミュニティセンター) は, キャンパスにおける異文化交流を目的とする学内機関である。早稲田大学では, ICC 主催による異文化交流イベントが数多く開催されている。学生スタッフは, これらのイベントの企画・運営を担う有償のスタッフである。
- 7) 「国際貿易ゲーム」は, 先進国チーム, 新興国チーム, 発展途上国チームに分かれ, 工業製品の生産, 及び国家間貿易を疑似体験するゲームである。
- 8) 「11 春」は, 東日本大震災の影響により, 全 13 週で実施された。

## 参考文献

- 古賀和恵・三代純平・古屋憲章 (2010a) 「クラス活動への主体的参加とは何か—『イベント企画プロジェクト』を対象とした探索的事例研究—」『2010 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 355-356.
- 古賀和恵・三代純平・古屋憲章 (2010b) 「多文化共生の環境づくりに向けた授業実践の試み—『イベント企画プロジェクト』のアクションリサーチから—」DVD『2010 世界日語教育大会論文集予稿集』, 236.
- 古賀和恵・三代純平・古屋憲章 (2010c) 「クラス活動への主体的参加とは何か—『イベント企画プロジェクト』を対象としたアクションリサーチ—」『言語文化教育研究』9, 91-114.
- 古屋憲章・古賀和恵・三代純平 (2011) 「日本語のクラスはいかにして実践共同体となるか—『イベント企画プロジェクト』を対象とする 3 学期にわたるアクションリサーチ—」『2011 年度日本語教育学会春季大会予稿集』, 196-201.
- 細川英雄・武一美・津村奈央・星野百合子・橋本弘美・牛窪隆太 (2007) 『考えるための日本語・実践編—総合活動型コミュニケーション能力育成のために—』明石書店.
- 三代純平・古屋憲章・古賀和恵・寅丸真澄・長嶺倫子・武一美・市嶋典子 (2011) 「日本語教育実践としてのアクションリサーチ—教育実践共同体の構築へ向けて—」『2011 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 107-112.
- Kemmis, S. & McTaggart, R. (1988) *The Action Research Planner*, Victoria: Deakin University Press, Third edition.